

書評

LGBTQ+の
健康レポート誰にとっても心地よい医療を
実装するためにLGBTQ+の
健康レポート誰にとっても心地よい医療を
実装するために

日高 庸晴

当事者の声を医療と教育現場へつなげる——
26年にわたる国内最大規模のLGBTQ+調査
“ヒダカレポート”

医学書院

- 著 日高庸晴
- 定価 2860 円(本体 2600 円+税 10%)
- 判型 A5
- 頁数 264
- 発行 医学書院

評者

社会医療法人誠光会 淡海医療センター
専門看護実践室
助産師/母性看護専門看護師

三田村七福子

社会的不可視性に挑む医療の未来
自律尊重の医療を誰にでも当たり前を提供するために

待望の書籍の発行

「やっとや……待ってました」。本書を手
にできたとき、思わず口からこぼれた言葉
です。しかし、拝読した直後から、「これを
“当たり前”とできる医療者や医療施設が、
いまの日本にどれだけ存在するのだろう」
という懸念がどんどん膨れ上がっています。

数年前から、当院の倫理委員会や倫理コ
ンサルテーションチームに、以下のような
情報や相談がもたらされるようになりました。
診察券やカルテの「名前・性別表記」
の変更要請、性別と異なる臓器の記載が含
まれる書類の扱い、入院病棟や大部屋の利
用について等々。その都度議論しなんとか
対応してきましたが、私たちに圧倒的に不
足していたのが、データや根拠でした。

ケアの標準化・システム化を進めること、
そしてその合意形成において、対象の概数
や病院への期待・責任など、いろいろな知
見や前例提示が必要です。しかし、それらに
なかなか辿り着けずに困っていたとき、も
うすぐこの書籍が発刊されると知り、今か
今かと待ち望んでいた次第です。

医療者が「知らない」では済まない
情報が満載

著者は、『社会的に不可視である存在を可
視化する』と、1998 年から行動疫学調査を
続けられています。本書は、その長年のご研
究結果による現状と課題が示されています
が、医療・教育現場についてさらに着目す
るといった2部構成となっています。

【第1部 当事者が置かれた現状と困難】
では、世界と日本における変遷や調査結果
について丁寧に提示・解説されています。
アウティング（暴露されること）への恐怖、
メンタルヘルスの安寧や受診行動の難しさ
などについて、その背景や対策の意義とと
もに記されています。また巻末には、70
ページにわたって種々の調査データが掲載
されていて、全ての読者の理解を支えてく
れる内容です。

個人的には、性的マイノリティへの無理

解が自殺念慮の社会的要因の1つになり得
ると国の自殺対策ガイドラインで言及され
ていたこと（2012年）、同性婚を法律で認
めてほしいと求める人（n=7172）の
74.5%にも及ぶ方々のその理由が「診療場
面で同性パートナーを家族と認めてもらう
ため」という事実（2022年）は、看過でき
ない情報だと感じています。

そして、医療従事者と医療機関がかみ締
めなくてはならない内容が、【第2部 医療
と教育現場での実装】の第5章・第6章に
記されています。

正解はわれわれ医療者が創っていく

本書を拝読した今、自分たちのこの方向
性は間違っていないと安堵する一方で、改
めてその意味や責任が押し掛かってきてい
ます。「電子カルテの性別欄の変更は適切
だったのか」「現在の受付対応フローは逆に
ステレオタイプ的ではないか」「さまざまな
変更によって職員に混乱が生じ、かえって
不快や不利益を与えてしまうことにならな
いか」といった懸念が次々と湧いてきます。
また、家族・パートナーの定義見直しのみ
ならず、この先には代理意思決定やACP、
親権に関連する課題もあります。

しかし当たり前ですが、その正解は本書
に明記されていません。私たちが私たちの
施設なりに創っていくしかありません。本
書に散りばめられたヒントを参考に、数年
かけて段階的に整えていくつもりです。

*

少し前、性別変更にも性別適合手術が必
須ではなくなり、東京高等裁判所でも同性
婚に関する新たな判決が出ました。

しかし一方で、医療や治療は“生物学的
性別”ありきです。エビデンス然り、システム
然り。さらに、ホルモン療法や性別適合手術
を受けた方々に関する中長期にわたる医学
的エビデンスはいまだ十分とは言えません。

社会的のみならず、医学的にもまだまだ
不可視です。この溝をどのように埋めて、追
いつき、両立させるのか。1人の看護実践家
として考え続けたいと思っています。